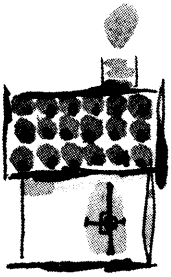
読書のすすめ

「死海のほとり」

遠藤周作著

横張和子



遠藤周作氏の作品はこれまでも読んだことがなかった。「沈黙」が評判作であったらしいが読まずじまいであった。これはその作品の姉妹篇であるということだ。

同じくキリスト教に題材を求めている。遠藤氏が格闘して求めているイエス像だが、氏がイスラエルの現地の風土の中にたずね、イエスの生涯にまつわった何人かの人々の群像の中に描き出そうとしている。そのイエス像はこれまでの教会の、また聖書のイエスとはかなりちがったものである。奇蹟を行ない得たイエスではない。氏のイエスはまことに要領の悪い、みじめに失敗をくり返す非力な男であり、取柄はただ優しいということであり、奇蹟のようなはれがましいことは何一つできなかったけれども、病む人、悩む人のそばにいて、慰め、誠実を尽す人であった。彼を迎える人々は、初めは救い主として期待し、ついてくるが、やがて何もできない無能な人とわかって、失望して見すて去って行く。

失意のイエスは策略にうまうまと乗せられ、死刑の宣告を受ける。群像の「知事」「蓬荒りの男」「百卒長」の段はイエスの十字架の道行を書いているが、徹頭徹尾とらわれたイエスのみじめさが描かれている。重い十字架を肉のおちたやせた身体にかつがせられ、血を流し、何度もころびながら、汚物を投げられ、狭い坂道をむち打たれて、刑場にせき立てられる。神の愛を説いてまわった男がなぜこのようなひどい目にあうのか、処刑に当たるローマ人には

その理由がわからない。

あえぐような苦しみの中でイエスが神にこうているのは、自らの苦痛の軽減でもなく、救いでもない、この苦しみによって他の人々の苦しみ、生と死のあらゆる苦しみがこれによって除かれるように、そのために、最もみじめで、最も苦しい死が与えられるようにということであった。神はその願いをきき入れて、最もつらく残酷な死への長い道のりを与えている。絶命への長い時間、十字架上のイエスは突如、「神よ、なぜ私を見すてられましたか」と悲痛な叫び声を発し、そして「すべてはみ心のままに」と息絶える。

この本はまことに弱い、この世的には落伍して、果てには死を招くほどに要領の悪い男としてのイエスが描かれている。愛は実ることの少ない、多くは裏切りで終わるものであった。ただここには誠実と親しみと神への従順があった。

この本を読んでいるとわれわれの日常の祈りが何であったかと思う。神とのつながりにおいて慎んで生活していると思うことさえ、重荷で不信に満ちたものであった。祈りはむなしく、不信を強めるばかりであった。しかしこの本を読んでいくうちに、神のみ心は全くわれわれの願望の次元を超えているものでないかと思われてくる。具体的な願望はどれもむなしく、目先のことにとらわれた利己的なものに思えてくる。神がわれわれにつかわされたというイエスは、このような生涯をとげた。それは遠藤氏のイエスで印象的である。イエスはわれわれにとって何であろう。この本の中からの一節をとれば

「イエスに人生のある時、横切られたものはイエスを忘れることができない、それはイエスが愛することをやめないからだ」

「私は何度も棄てようとした、しかし私をあなたは見棄てない」

愛の非力、そしてまたこの強靭な強さ、キリスト教の愛とか祈りとかについて、考えさせる本であった。

（元　お茶の水女子大学）